



新潟 山古志  
Niigata Yamakoshi

これは、普通の旅とはちょっとちがう、  
新しい自分と世界に出会う旅。

旅の途中で誰かのお手伝いをしたり、  
その土地の課題と向き合ったり。  
自由時間は、仲間と自然と、思いっきり遊んでみる。

課題を知ったから、その土地をもっと好きになる。  
出会ったばかりの仲間だから、素直に話せることがある。

思わぬトラブルだって、  
きっと忘れられない思い出になるから。

キミも、日本のどこかの仲間と一緒に  
ちょっと世界を変えちゃう冒険にでかけませんか？



# 新潟 山古志

## Niigata Yamakoshi

雪の国で、  
天に昇る炎に  
復興の願いを込める旅。

冬には3~4mの積雪がある豪雪地帯・  
山古志（やまこし）では健康と豊作を祈る  
「古志の火まつり」が行われてきました。  
わらを積み上げて作る  
高さ25mものさいの神に火をつけると、  
まるで炎が夜空にのぼって行くように見えます。  
2004年中越地震からの復興と、それを  
豊かなめぐみに変える人々の知恵を学びながら、  
祈りの炎をともしお手伝いをしてきました。





# 山古志レポート

2023.03.09-03.12

旅する  
ボランティア



トンネルを抜けると、視界には銀世界が広がった。  
ここは、2004年の新潟地震で全村避難を強いられた、新潟県  
長岡市山古志地域。



今年、健康と豊作を祈る「古志の火まつり」が35年の歴史に幕を閉じる。  
見知らぬ雪国の地で、偶然集まった初対面のメンバーと一緒に、復興の願い  
を込める旅が始まった。



はじめに、自己紹介タイム。

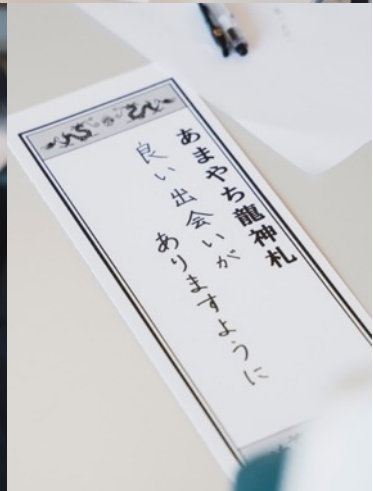
グループに分かれて、お互い共通点を書き出す。

「大学生、兄弟がいる、人間...」  
まだ、共通点もあんまり出てこない。



「明後日は、古志の火まつりが開催されます。人口減少と高齢化に伴い今年の開催を最後に休止が決まりました」  
火まつりの一番の目玉は、高さ25メートルもある日本一の”さいの神”だ。  
さいの神は、4000束のカヤが必要で、毎年多くの人々の手で作られていた。  
しかし人口が減少した今、作り手の確保も難しく、今年で幕を閉じる





祭りの日に、さいの神と一緒に燃やすお札に、願い事を書いていく。

- 「良い出会いがありますように」
- 「家族・友人・関わる人たちが健康で平和で幸せに過ごせますように」
- 「無事に大学の単位が取れますように」



「中越地震は、ちょうど稲刈りが終わって農家もゆっくりしていた時期の夕暮れに起きました」



やまこし復興交流館「おらたる」。2004年に発生した中越地震から、村が復興するまでの様子を展示でたどる。



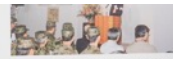


中越地震を経験した当時のお話を伺う。  
大きな地震を経験したことのないメンバーも多い。実際に話を聞き、土砂まみれのビデオデッキを見ると言葉失うばかりだった。

「震災によって仮設住宅に入った92%の人が、山古志に帰りたと言ったのです」

震災から約3年2ヵ月で、山古志は全村帰村を成し遂げたという。

突然失われた故郷を取り戻すために、どれだけ大変な思いをしたのだろう。山古志の人々の強さと、繋がりを感じる。



山古志の復興まちづくり 平成16年12月23日



山古志の復興まちづくり 平成16年12月23日



山古志の復興まちづくり 平成16年12月23日



山古志では日頃から“共助”の考えが根づいていたため、震災直後も食べ物に困らなかったという。「特別な訓練をしていませんでしたが、地域コミュニティの強さで、まとまった避難行動ができました」

いざという時に、命を守るために必要なこと。それは、物質的な備えだけでなく、人とつながり、助け合うことだった。



日本屈指の豪雪地帯でもある山古志地域。  
毎年2m以上の雪の壁が道路の脇にできるのも珍しくない。



“雪かき道場”が開かれ、  
スコップの使い方を教わった。  
テコの原理を利用し、真っ白な雪を  
掘っていく。





チームに分かれて、雪を高く積み上げる勝負が始まった。

無我夢中で積み上げていくと、次第に距離が縮まっていく。

「はじめは時間をかけてでも土台をしっかりと作っていくのが大切です」

そのアドバイス通り、時間をかけて土台を作っていたチームが、一番最後まで高く積み上げることができた。

土台を築き、みんなで力を合わせて積み上げていけば、予想外のところまで到達できる。その価値に、改めて気付かされた。





1日目の夜は宿に戻り、中越地震が起きた後、現地で支援活動を行っていた方からお話を伺った。

「72時間、これは一般的に人が水を飲まなくても生きられる限界ライン」  
「災害時に救助隊などが助けられる割合はわずか数%に過ぎず、ほとんどが自助か共助だと言われています。だから、普段からの備えが大切なんです」

災害を実際に支援された方から語られる言葉によって、改めて防災の意識が高まった。





2日目は、いよいよ火まつりの会場設営。  
来場者に楽しんでもらう雪の滑り台は、実  
際に自分たちが滑ることで成形していく。





作業をしていくと、だんだんと体が熱くなる。真っ白の雪の中、半袖になっているメンバーも。





午後からは会場のテント設営。  
力を合わせて、最後にピタッとはまった時に「おー！」と声が揃う。  
「さっきよりも早くなった！」  
だんだんとみんなの息がそろっていくのを感じる。







午後にはすっかり慣れた手付き  
でテントを張っていく。

「だんだんうまくなっていく  
じゃん！」

地元の人に褒められて、つい頬  
が緩む。





あまりに巨大なさいの神。横断幕が真っ直ぐになるように、ゆっくりおろしていく。みんなで声を掛け合い、徐々に会場が出来上がってきた。

「お祭りも、誰かの準備があるから、できるものなんだ。」  
こんなふうには準備をしてみて初めて気づけたことだった。





本番にむけて最後の打ち合わせ。「みなさんの力を借りながら、古志の火まつりを成功させたいと思います」実行委員会の方の言葉に、一層気持ちが高まった。



夕食後は、アイスを食べながら、ゲームや野球観戦をした。一日中動いたからか、100円のカップアイスはいつもの何倍も美味しい。



「普段は一人での行動が好きだけど、こうやってみんなと一緒にいるから楽しい事もあるんだね。山古志にこれって良かった」  
初めは口数の少なかったメンバーもすっかり打ち解けていた。



翌朝、5時40分。

眠い目をこすりながら、朝日を見にみんなで外へ。

山の麓には雲海が広がり、曙の空をじっと見つめる。  
東の空に、朝日がゆっくりとのぼっていく。





いよいよ、古志の火まつり本番。

交通整備をしていると、地元の方が温かい飲み物を差し入れしてくれた。自分たちがボランティアで来ていることを忘れてしまうほど、山古志の人々の温もりに、力をもらってばかりいる。







午前11時。大きな太鼓の音とともに古志の火まつりファイナルが始まった。昨日張ったテントの下には山古志の特産品を販売するブースが連なり、雪の滑り台にはたくさんの子供たちが並んでいた。



名物・雪中角突き大会。  
「震災時、生きていた牛は1匹も残すことなく、ヘリで救出しました」  
山古志の伝統を守るべく、  
村人の命懸けの行動によって現在も続いている。  
6頭の闘いが終わった後、  
会場は拍手で包まれた。







さいの神の中では、願い事を書くお札を渡していく。

「ながい間、古志の火まつり、ありがとう」

「今年も家族全員、健康で過ごせますように」

山古志の人々の最後の願いが書かれた札を見ながら、地元の人に愛される火まつりにボランティアとして関わったことを改めて誇りに思う。

午後6時、いよいよ古志の火まつりもクライマックス。  
暗がりの中に立派なさいの神がそびえ立つ。  
火の灯った松明を手に、最後の点火者6人が出揃った。

「山古志を代表するこの祭りで、最後の点火者として名を刻めることは、山古志に生まれ山古志に育った者として、一生の誇りです。ありがとう古志の火まつり」  
点火者の声会場に響き、さいの神に松明を近づける。







その瞬間、ものの数秒でさいの神は炎の柱となって空高く舞い上がった。

離れたところにも伝わってくる熱気。バチバチと炎の燃え上がる音で響き渡る。

最後の炎を目に焼き付けるように、空を見上げる人々。

古志の火まつりはたくさんの人に  
見守られながら35年の幕を閉じた。



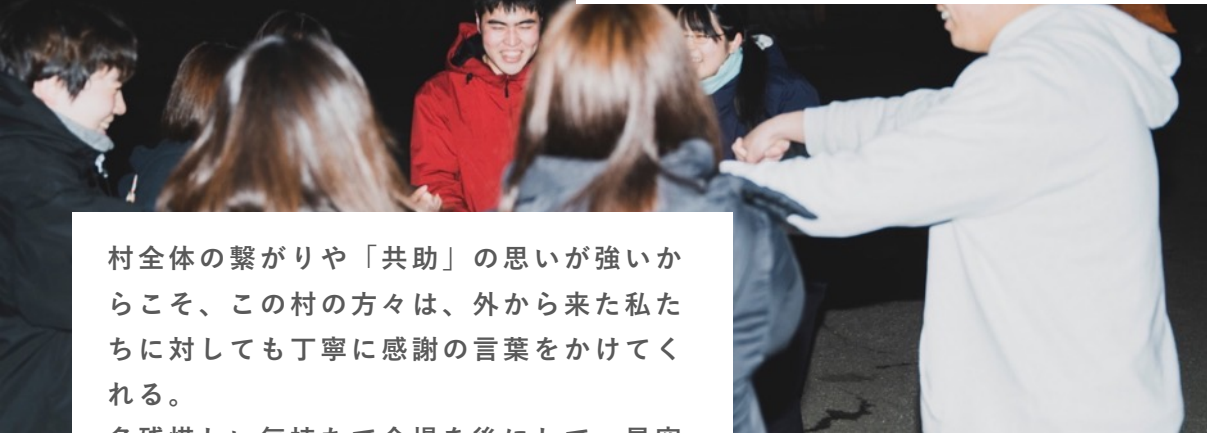


火まつり終了後、会場の後片付けをすすめていく。旅にきて、山古志の人々の想いに触れ、1つ1つの作業にも気持ちがこもる。





「山古志は、全国のみなさんのおかげで  
中越地震を乗り越えられた地域です。  
最後の火まつりも、本当にみなさんのお  
かげで作り上げることができました」  
最後にそう語ってくれたのは、火まつり  
実行委員の方だった。



村全体の繋がりや「共助」の思いが強いからこそ、この村の方々は、外から来た私たちに対して丁寧な感謝の言葉をかけてくれる。

名残惜しい気持ちで会場を後にして、星空を見ながら宿へと帰った。



最終日は、古志高原スキー場でスキーやスノーボードを楽しんだ。リフトを登った先に見える眺めは、壮大で、ここまで来るのに不安だった気持ちもちっぽけなものを感じる。どこまでも続く雪山を背に、爽快に滑っていく。







「初めて」をいっぱい経験できたこの旅。  
みんな鼻の先を赤くして、時間いっぱいまで楽しんだ。





山古志の旅もこれでおしまい。

バスの中で、この4日間のことを振り返りながら、山をおりていく。メンバーの1人が、

「実は、落選メールが届くことを願うほど、この旅にくるのが不安だった」と話してくれた。旅を通じて一歩踏み出せた経験が自信に繋がったという。



あの時、勇気を出して一歩踏み出してみなければ、出会えなかったメンバーと、山古志と、新しい自分。

今なら、お互いの共通点もたくさん書き出せるだろうし、違いもたくさん言い合えるだろう。

辺りにはまだまだ雪が残っていたが、来た時よりも不思議と寒さを感じなかった。



## みおん

(東京都出身・20歳)

参加したきっかけは？

私は高校生のときにニュージーランドに留学した経験があります。そこで日本と海外の違いに触れて、「もっと日本を知りたい!」と思ったのがきっかけです。

日本国内でも地方によっていろいろな違いがあります。日常生活の違いは住んでみないと分からないことが多く、旅行ではなかなか深いところまで知ることができません。でも、「旅×ボランティア」なら旅行では体験できないような地域との交流があると思って参加しました。

この旅を通じて気づいたこと

自分の長所に気づくことができました。この旅では、一緒に旅する仲間もそうだし、現地で出会う人もみんな初対面です。そのような環境で4日間過ごしてみて、「自分って案外、全く知らない人の中に入り込んでいくことが得意なんだな」と気づきました。

この経験から、もっと大学生活で年齢や国籍など関係なく、いろいろな人と関わって、自分のステレオタイプをなくしていきたいと思いました。

## 旅で変わったこと・得たこと

ボランティアに対するイメージが変わりました。参加前は、「ボランティア＝やってあげるもの」だと考えていました。しかし、実際にやることでボランティアは両者にとってWinWinな関係で、楽しさや人の優しさに触れられる最高の機会だと思いました。

たとえば、私が交通整備をしていたら、それを見た地元の方が温かい飲み物を差し入れしてくれたり、お土産を持たせてくれたりなど、逆にたくさんの物や温かい気持ちを頂いたような気がします。

## 応募を迷っている人へ

少しでも行きたい気持ちがあるなら、絶対に挑戦してみたほうが良いと思います！参加することで、自分が今まで見えなかった世界が広がるからです。また、現地の人との交流や、同世代の人との出会い、その土地での学びなどたくさんのことが得られるので、ぜひ一歩踏み出してみてください！





参加したきっかけは？

ボランティアをすることが初めてで、純粋にやってみたい気持ちがありました。「旅するボランティア」と聞いて楽しそうだし、地方にも行けてボランティアの経験もできるところに魅力を感じ、申し込みました。また、就活の本を読んでいた時に、「軸」を決めることの大切さを知り、自分の「軸」を見つける良い機会にもなりそうだと思ったからです。

この旅を通じて気づいたこと

私たちが「ボランティアに行く」ことだけでも、現地の方々に元気を与えられるんだなと実感しました。「来てくれてありがとう」「若い人がいるだけで、元気が出る」という言葉を本当にたくさん頂きました。そのうえで、「自分にできることは何かないかな？」と考え積極的に行動して現地の方の力になれたとき、「ボランティアって楽しい！」と心から思えました。

こはる

(大阪府出身・18歳)





### 旅で変わったこと・得たこと

自分の新たな一面に気づくことができました。私は、みんなで何か1つのことをする時に、どちらかと言うと引っ張るタイプでした。しかし、今回は私よりもリーダーシップをとれる子がいたので、サポート側に回るようにしたんです。それが意外と楽しくて、「メンバー同士を繋ぐ役割も向いているのかも」と、自分の新しい一面を発見できました。環境がいつもと違うからこそ、気づけたことだと思います。

### 応募を迷っている人へ

旅するボランティアは、今の自分が思っている想像以上のものを得られるプログラムだと思います！あまりボランティアをしたことがない人や、今の環境を変えてみたいなどと思っている人におすすめです。初めての環境に飛び込むのは勇気があることかもしれませんが、全員1人で来ているので、みんな平等に仲を深めながら楽しむことができます。「一歩踏み出して良かったと思える体験」になると思うので、ぜひ勇気を出して参加してみてください。





## ゆうや

(東京都出身・21歳)

### 参加したきっかけは？

もともと東京から北海道まで在来線で行くほど旅が好きでした。大学に入ってボランティアもやってみたかったので、「旅するボランティア」はぴったりだと思い参加しました。また、「山古志」という自分1人ではなかなか行けないような土地に行けるのも理由の1つです。地方創生にも興味があったので、実際に地域の方が何で困っていて、自分たちには何ができるのか知りたい気持ちもあり、参加しました。

### この旅を通じて気づいたこと

古志の火まつりが後継者不足で今年で終わってしまうという事実があるように、「人手が足りない」ことは課題だと感じました。しかし、それ以上にみなさん明るくて、地域の未来について前向きに考えていることがわかりました。どの方もお話しても地元愛が強く、逆に僕が生きる力や元気をもらったように感じます。





### 旅で変わったこと・得たこと

初めてのボランティアでしたが、まるで学校行事を一緒に作り上げるような感覚でした。これまでの大学生活で人と対面して深く関わる機会があまりなかったので、こうしたプログラムを通じて、改めて自分と向き合う機会にもなりました。次は、災害支援などもっと他のボランティアにも参加してみたいと思います！

### 応募を迷っている人へ

旅が好きな人や少しでもボランティアに興味がある人、興味がなくてもやった事がなかったらぜひ1回参加してみたいです！4日間泊まり込みで、知らない人たちと一緒に旅をしながらボランティアできる機会はなかなかないですし、達成感も味わうことができます！最終日には「終わってしまうのが寂しいな...」と思えるくらいになるので、ぜひ勇気を出して一歩踏み出してみてください。

# 参加者の声

旅とボランティアを  
掛け合わせる、  
という発想が面白かった。

新しいことに  
挑戦したかったから！

今回どうして参加したの？

大学生活で1回はボラン  
ティア活動を行ってみたい  
と思っていたから。

地域の人とかかわりた  
かったから。

最後の火まつりを、運営側と  
して見ることができたこと。

山古志の人と交流できた  
ことが一番の思い出です。

何が印象的だった？

自分が準備したイベントで、  
参加している全員が楽しそ  
うに過ごしていたこと。

夜のマイムマイム

自分の人生の中で  
とても濃い4日間になった！

まだまだ日本には  
自分が知らない魅力が  
たくさんあるのだという  
ことに気がついた。

これから参加する人に  
伝えたいことは？

すごく楽しかったです！  
初めて会った10人とこ  
んなに仲良くなれるとは  
思いませんでした。

楽しいのはもちろん、  
普通の旅行や授業では  
体験できない経験が  
できる！

出身の違う人同士が  
山古志に集まることで、  
地元にはない多様性に  
たくさん触れることが  
できた。



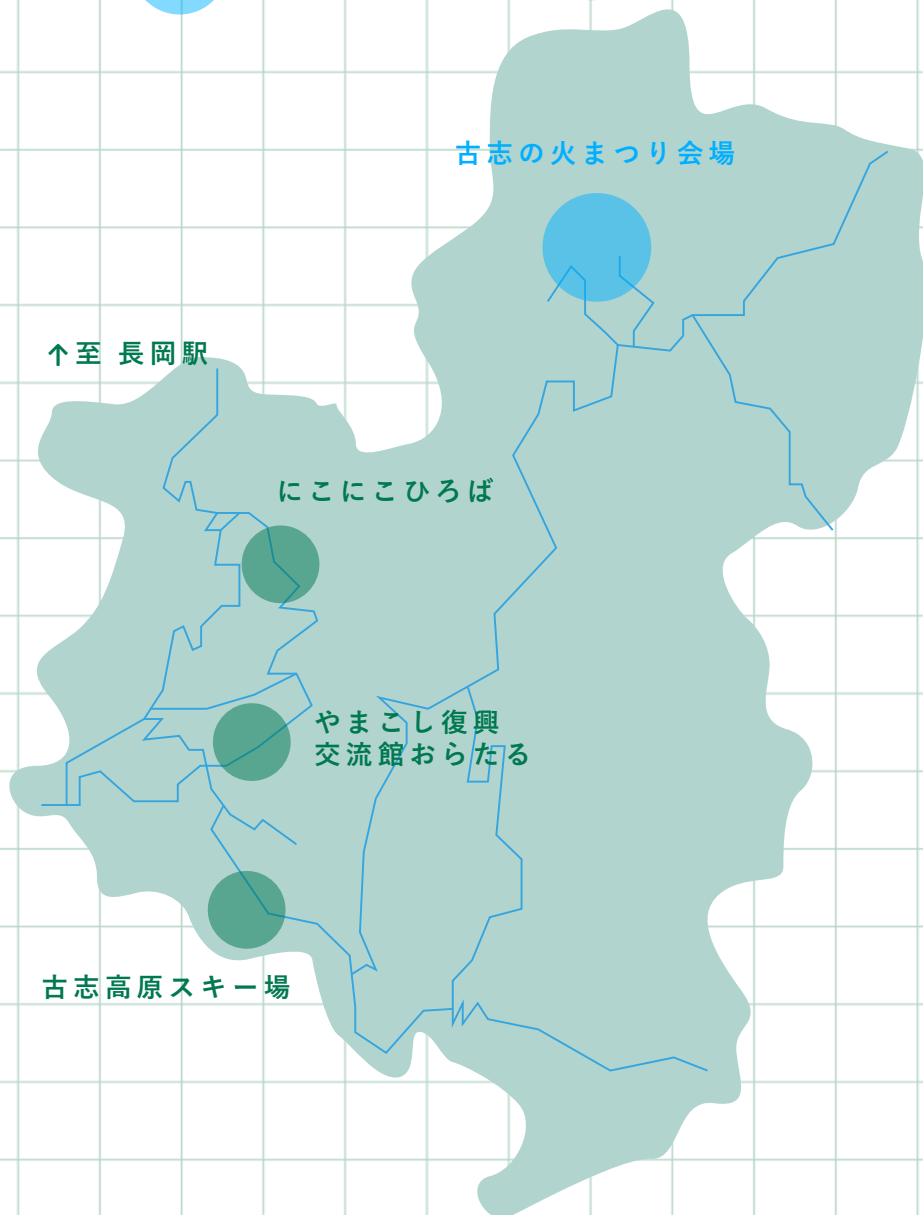
# Map



活動場所



立ち寄りスポット



1km

Niigata Yamakoshi

# Program

## Day 1

長岡駅 到着

やまこし復興交流館「おらたる」

雪かき体験&雪つみ競争

## Day 2

古志の火まつり 前日準備

会場設営、雪の滑り台成形、ステージ準備など

## Day 3

古志の火まつり 運営サポート

受付、会場案内、体験ブースのお手伝いなど

## Day 4

古志高原スキー場でアクティビティ

自由時間

長岡駅 出発





旅するボランティア

Report vol.4

新潟 山古志

Niigata Yamakoshi

雪の国で、天に昇る炎に  
復興の願いを込める旅。

Photo by Koya Yaeshiro  
Writing by Natsumi Sugeta

